

ペテロの手紙第二章1-11節 「神の栄光にあずかる備え」

1A 神にあずかった者たち 1-4

1B イエスの知識による平安 1-2

2B 栄光と栄誉による3-4

2A 実を結ぶ信仰 5-11

1B 不断の霊的訓練 5-9

2B 選びと召しの確認 10-11

本文

ペテロの手紙第二を読みます。第一の手紙で、ペテロは、パウロが殉教して間もない頃であったであろう時、アジアの諸教会に対して書いていました。おそらくローマから書き記していたと思われます。ペテロは、ローマで始まった皇帝ネロによる迫害が、アジア(今のトルコ)にも間もなく及ぶに違いないことを悟って、それで手紙を書いたのでしょう。迫害を受け、苦しみを受けるキリスト者は、むしろ、苦しみを受けることはみこころにかなっていると教えました。そして、第二の手紙は、ペテロ自身が死刑になる直前に書かれています。1章14節に、「私は幕屋を間もなく脱ぎ捨てることを知っています。」と言っています。

ペテロは、第一の手紙においては、外から来る圧迫を語りました。第二の手紙では、内から現れる「偽教師」との戦いを教えているのです。私たちが戦うべき相手も、またその性質も外と内では変わります。自分たちの仲間から、偽の教え、人々を墮落せしめる教えを持ち込んでくるものがあります。今の世の汚れに迎合しないように生きれば、迫害がありますが、迎合してしまえば問題がありません。そうやって、偽の教えが忍び込むのです。どのように、偽の教えに我が身を備えるべきなのかを教えています。

それを一言でいうならば、「神とキリストを知ること」であります。主ご自身を親密に、人格的に知ることによって献身することです。この霊的成長によって、悪いものから守られます。

1A 神にあずかった者たち 1-4

1B イエスの知識による平安 1-2

¹ イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって、私たちと同じ尊い信仰を受けた方々へ。

ペテロは、挨拶から始めています。自分のことを、「使徒」と言っていますが、その前に「イエス・キリストのしもべ」と言っています。ペテロには、自分が主の憐れみと恵みによって、こ

の方に罪が赦され、仕えるようにさせていただいている、しもべにすぎないのだと言っています。へりくだりがありました。そして、彼は自分のことを、「シモン・ペテロ」と言っています。シモンは元々のヘブル語の名前です。ペテロは、主ご自身から名前が与えられ、石という意味でギリシア語です。ですからペテロは、ユダヤ人に対する使徒として、ユダヤ人信者も意識しています。

そして、ペテロはイエス・キリストご自身のことを、「神であり救い主」であると言っています。「神、また救い主」と書いていないのです。ここの新改訳の訳は全くその通りで「神であり救い主」です。つまり、主イエスご自身を神だと言っているのです。主ご自身が、「わたしは父と一つだ」と言われたところと一致しています。そして、私たちは自分たちの義ではなく、「イエス・キリストの義によって」と言っています。義が私たちに属しているのではなく、神のものであり、それが贈り物として与えられたことを教えています。この方の正しさによって、恵みによって今の私たちがいるのです。

そして、「私たちと同じ尊い信仰」と言っています。ペテロは、自分たちが受けたのと同じ信仰なのだ、共有しているのだということを強調しています。場所が離れていても、信仰は一つで、一つのキリストのからだとして交わりがあります。古代に生きた使徒たちの信仰と、私たちは共有しています。そして世界中のキリスト者に与えられた信仰と私たちは、同じ信仰を与えられています。そして、ペテロは「尊い」という言葉が好きです。第一の手紙に、例えば、「1:18 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、」とあります。私たちの受け取った賜物、信仰そのものがどれほど尊いことなのか、その感動をペテロはここに書いています。

² 神と、私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたにますます豊かに与えられますように。

ここに、第二の手紙の中心的内容が書かれています。「神と、私たちの主イエスを知ること」です。手紙の終わりは、「3:18 私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」とあります。ここでの知識というのは、また1章2節の知るというのは、知的なものではなく、人を知るというのと同じ、親密に知り合いになるという意味です。イエス・キリストを知り、その恵みを知るというのが、成長であるということです。第二の手紙では、人を世の汚れの中に巻き込んでいく偽教師たちが出てきたことを警鐘する内容に2章から入ります。主イエスを知ることが、いかにそれらの汚れから救われるのかを、ペテロは熱心に手紙の中で話しています。

そして、主を知ることによって、「恵みと平安」がありますが、それが、「ますます豊かに与えられますように」とあいさつしています。ペテロは、霊的成長を取り扱っているのです。イエス・キリストに恵みがあります。けれども、イエス・キリストを知ることによって、ますます恵みに豊かにされます。今のままで満足しないでください、もっともっと主は恵みを注ごうと待っておられるのですよ、という

ことです。ヨハネは、「ヨハ 1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。」と言いました。そして、恵みが増し加われれば、さらに平安に満たされます。

2B 栄光と栄誉による召し 3-4

³ 私たちをご自身の栄光と栄誉によって召してくださった神を、私たちが知ったことにより、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔をもたらすすべてのものを、私たちに与えました。

霊的に成長するために、必要なものはすべて与えられ、備えられているというのが、ペテロがこれから話すことです。

まず、私たちが神によって救われた時に、それは神にとっては召したことになります。神が私たちを選び、そして、召してくださいました。それは、神ご自身の「栄光と栄誉」によって召されました。神の栄光があります。そして神の栄誉というのは、美德、あるいは善と言ったらよいでしょう。神が栄光に輝く方であり、かつその徳にとって私たちは召されました。モーセのことを思います。彼は、天からシナイ山に降りて来られた主にお会いするために上りました。そこで宣言された主の御名は、主の善、主の美德に満ちていました。主は情け深い神、怒るに遅く、恵みが千代にまで及ぶ、という名です。また、幕屋が建てられたら、そこが栄光の雲で満ちました。その中に入って来るように召され、主が、ご自分が聖なる方であることを証しされました。そして私たちは、キリストにある神の栄光と栄誉によって召されたのです。「ヨハ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」

そして、私たちは、この神を知ります。知ったことにより、「主イエスの、神としての御力」が与えられています。人となられた主イエスに、神の御力が現れました。福音書の中に、御力を受けた人々が数多くでできます。そして何よりも、死者からの復活によって、御力が現れました。そして、その力が、「いのちと敬虔をもたらすすべてのものを、私たちに与えました」と言います。その御力が、私たちが、神のいのちにあって生きること、また敬虔に生きることの力となるのです。

⁴ その栄光と栄誉を通して、尊く大いなる約束が私たちに与えられています。それは、その約束によってあなたがたが、欲望がもたらすこの世の腐敗を免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。

主イエスの神の御力が、私たちに与えられています。そして、その御力が現れるための手段が、様々な神の約束なのです。自分の預金口座に、とんでもない額のお金が入金されたとします。神が入れてくださいました。そして、神は次に、「銀行に行って、通帳と身分証明書、またハンコを持っていきなさい。前もって現金化すると伝えないと、銀行にはそれだけのお金が用意されていない

から、事前に電話しなさい。それから受付に行きなさい。そうすれば、お金を引き出せるよ。」と言ってくれたとします。こういったことが、神の約束なのです。例えば、イエス様が、「マタ 6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」と言われます。主の御力が、約束によって洗われるのです。

それらの約束のゆえに、第二の手紙で強調されているのは、「欲望がもたらすこの世の腐敗を免れ」ということです。偽教師というのは、再び心の定まらない人々を欲望の虜にしていくというものです。しかし、私たちはこれらの世の腐敗から、尊い大なる約束によって、免れているのです。「神のご性質にあずかる者となる」と強調しています。

2A 実を結ぶ信仰 5-11

午前礼拝でも、私たちが、主のご性質にあずかって、神の栄光を現すことが、神のみこころであることを見ました。そこで、5 節からは、私たちが今、神を信じているということだけでとどまっていない、そこから前進して、ますます神の恵みを豊かに受けるための勧めをします。

1B 不断の霊的訓練 5-9

⁵ だからこそ、あなたがたはあらゆる熱意を傾けて、信仰には徳を、徳には知識を、⁶ 知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、⁷ 敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。

私たちには、今、読んだように、神のご性質がすでに用意されています。それが、実なって結ばれていくためには、私たちが「あらゆる熱意を傾け」ということです。私たちの肉からは、ここに書かれているものは、決して生まれません。かえって、争いや妬み、その他の悪い者が出てきます。しかし、いのちと敬虔をもたらす神の御力が、約束を通して与えられているので、そこに熱意を傾けるのです。そこで、単に神を信じて、イエス様を信じましたというだけの人生ではなく、実を結ぶ人生になるのです。ピリピ書でこのことを、「救いを達成するように努める」というところで学びました。「2:12-13 こういうわけですから、愛する者たち、あなたがたがいつも従順であったように、私がともにいるときだけでなく、私がいなくても今はおさら従順になり、恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」主に従順になりながら、救いの完成に向けて務めていると、主ご自身が、私たちの志に働き、事を行おうとしている時に、働いてくださるのです。

人間の身体にも、同じ原理が働いています。身体には不思議な力、神からの力が与えられています。自分が筋トレやストレッチなどの運動を始めて、それを実感しました。筋トレでは、自分の筋肉に負担をかけます。それは、少し無理がある程度でないといけないそうです。本当は 30 ㌔の重石がちょうどいいのだけれども、そこで 35 ㌔の重石にかえる。もうきつい！という、無理すぎず、でも、きついという程度でないと筋肉が成長しないそうです。

その筋肉の成長の仕組みを知って、驚きました。筋肉は、傷をつけることによって、その修復の作業で成長するのだそうです。「トレーニングなどで刺激を受けた筋肉は、筋線維の一部が破断されます。その後、適切な栄養と休養を与えることにより、傷ついた筋肉は修復されます。このとき筋線維は以前よりも少し太くなって修復されるので、結果的に筋肉が大きくなります。これを超回復といい、繰り返すことで筋肉の体積が増加し、筋力アップにつながります。」¹筋線維の一部が破断したら、以前よりも少し太くなって修復されるということ、つまり「壊れたら逆に、成長する」ということ、これには驚きました。

これと、イエス様が山上の説教で語られた、誰が幸いな人なのかを思い出すと納得が言ったのです。「心の貧しい人は幸いです。悲しむ人は幸いです。柔和な人は幸いです。義に飢え渴く人は幸いです。」などなど、まるで世の価値観と真逆です。けれども、心が貧しくされるという、傷がつくようなことが、かえってその傷の後の回復があり、そこに幸いがあるというものなのです。何も傷がない、壊れたり、心が破れるようなところがないのは、人をむしろ腐らせてしまうのです。だからイエス様は、今、富んでいる者、笑っている者は災いと教えます。

そこでここでは、ペテロが、一つずつ加えて重量を増やしていきなさいと教えているのです。初めに、「**信仰には徳**」を加えるのです。神を信じています、イエス様を信じていますというだけで終わらせません。信じていることの実質を求めます。例えば、イエス様が戻って来ると喜んでいるけれども、イエスが清いように、自分を清くしているか？と問い直してみます。次に、「**徳には知識**」を加えます。良いとされていることを求めていく中で、聖書から何が徳とされているのか、知識を得る必要があります。そして、「**知識には自制**」です。神の知識は、神が示そうとされていることのみ、私たちは知識を得ることができます。実は、神は「御顔を隠しておられる方」とも呼ばれるほどで（イザヤ 8:17）、ご自分のすべてを明かすことはなく、ただ信頼しなさいと促しておられます。ですから、「**自制には忍耐**」です。知らない中でも、それでも神を信じていくのに忍耐が要ります。そして、私たちはヘブル書とヤコブ書でも学びましたが、「**忍耐には敬虔**」です。忍耐することは、ただ我慢するものではありません。信頼して待っているのです。その中で、神を恐れ敬う姿勢が育っていきます。

そして、「**敬虔には兄弟愛**」です。ただ、神を恐れ敬うだけでなく、そこに自分と同じ、信じて神によって生まれた子たち、つまり信仰による兄弟たちを愛していきます。その兄弟愛から、最後に、「**愛**」を加えます。兄弟愛は、自分とつながっているところから出てくる、交わりの対象としての愛です。けれども、「**愛**」すなわちアガペーは、「**世**」をも愛する愛です。世は、神に反抗している世界です。悪魔が支配しています。しかし、その中にいる人々さえ愛します。無視する人々、反発する人々を愛します。害を加える人を愛します。

¹ <https://cp.glico.jp/powerpro/training/entry16/>

私たちは愛を信じています。これが最も大事なものだと思っています。けれども、そこには今、見たような霊的鍛錬の積み重ねが必要です。遠くにいる人は愛せると言えますが、目の前にいる人は？ 海外宣教に行きたいと言っている若者には、たいてい、「自分の周りで宣教していますか？」と尋ねます。地道な霊的鍛錬の結果なのですね。

⁸ これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、私たちの主イエス・キリストを知る点で、あなたがたが役に立たない者とか実を結ばない者になることはありません。

ここは、「主イエス・キリストを知」っていると言いながら、その実はどこにありますか？と問われて、見えてこないということにはならない、という意味です。「役に立たない」ともありますが、キリストを信じている者が、信じている者として役に立つのは、実が結ばれているかどうか？であります。来週、BFP の日本支部の方が来てくださいます。BFP は、ユダヤ人に助けの手を伸ばすキリスト者の団体ですが、現地のユダヤ人に「どんな団体ですか？何を信じていますか？」と尋ねられたそうです。返答しようとしたら、「いや、答えてもらわなくてよい。二週間、活動を見させていただく。それで、何を信じているかがわかるから。」知恵のある観察ですね。実を見てから、何を信じているのかを推し量るのです。

このことをイエス様が、弟子たちに教えられましたね。「ヨハ 15:5-6 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。わたしにとどまっていなければ、その人は枝のように投げ捨てられて枯れます。人々がそれを集めて火に投げ込むので、燃えてしまいます。」枝は幹につながっているから、役に立ちます。実が結ばれていなかったら、火に投げ込まれる燃料ぐらいにしか、役に立たないのです。

⁹ これらを備えていない人は盲目です。自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまって、近視眼的になっているのです。

「盲目」と言っています。霊的な鍛錬を受けていないと、自分が霊的にどのような状態になっているのか見えていないのです。そして、「近視眼」というのは、目の前のものしか見えないということです。主が後に与えられる栄光について、度外視しているのです。「自分の以前の罪がきよめられたことを忘れて」しまっているとあります。2 章には、欲望に対してやりたい放題にさせる偽教師について、取り扱います。一度、汚れから免れたのに、再び虜になることは、以前よりも悲惨になると警告しています。犬が、自分が吐いた物に戻ると言っています。自分が嫌悪して、捨てた汚れの中に、再び戻ってしまうのです。けれども、今の感覚だけに頼って近視眼になっているから、その状態が見えていません。

2B 選びと召しの確認 10-11

¹⁰ ですから、兄弟たち。自分たちの召しと選びを確かなものとするように、いっそう励みなさい。これらのことを行っているなら、決してつまずくことはありません。

自分が召され、選ばれているということは、キリストにあって傷のない者になることです。「エペソ 1:4 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。」これを、私たちは天から主が戻ってこられて、栄光の姿に変えられるのだから、今は何もなくてよいとするのは、霊的な怠慢です。確かに召されて、確かに選ばれているのだということを、自分が今、主を知っていく中で確認させていくことです。そして、「決してつまずくことはありません」と言っています。これらのことをやりながら、それで罪を犯すことはできないということです。ペテロは、否定的な部分ではなく、積極的なところに集中しなさいと教えているのです。

¹¹ このようにして、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを、豊かに与えられるのです。

召されている、選ばれているということは、イエス・キリストの永遠の御国の中に入るという約束があります。けれども、かろうじて入るのか、それとも豊かにされて入るのか、それは私たち次第ということでもあります。パウロが、このことを火の中を通ることにより、真価が試されることを話しました。「1コリント 3:11-15 だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」

私たちは、単に御国に入るのではなく、その恵みを豊かにされるのです。それは、主を知っていく中で、そのご性質にあずかる中で、将来においても、恵みが、すなわち大きな相続が与えられるということです。タラントの喩えがありますね、五タラント受け取った者が五タラントもうけ、二タラントの人が二タラントもうけ、一タラントの人は地に隠しました。五タラント、二タラントのしもべが、「私はあなたにたくさんの物を任せよう。」と主人は言いました。このたくさんの物が、恵みが豊かに与えられるということです。かろうじて入ればよい、ということではないのです。

御国に入るまで、その栄光に入るまで、私たちは何もしないでいる姿勢ではありません。ちょうどそれは、飛行機が到着地に向かって走っているけれども、前進していないと墜落するのに似ています。主が来られて、御国が地上に立てられる時まで、地上では完全にされません。それであきら

めるのではなく、先にある将来に向かって前に進むのです。先にはこのような栄光があることを知って、今の自分に与えられている恵みに行きます。その恵みとは、主の御力が与えられ、主の約束を通じて、神のご性質にあずかることです。単に信じているだけでなく、そこから徳へ、知識へ、自制、忍耐、兄弟愛、そして愛に進むのです。